枇杷園句集 前篇 上

913
イ
3-1-1

士朗先生著

枇杷園句集

尾陽　文光堂藏

愛知県文化会館
39.11.25
114200
A913
1
3-4-1

愛知県有物品

士朗先生初刀圭餘暇嘗蒔
菊之風至十九年無恙焉雖為
七十餘年不常極位至貴
不忘四季皆有之花菊果
樹一枝赤松樹擬比那邊西
同枇杷園殊爾爾不

陳四綱の殊績を聚め或
称頌記録する人少なからず
英藪を富む。東国望重し
樵山新月。影斜度樹。
出でて對して四美を尋ね
暮雲春樹。美貴賞に殊なり

下故に未だ嘗多業務須
度。又嘗て嶽に帰り出でて
て辭。業を勝相に為す。
此集即年の桂山蓋而
年洋松先不解也。書集
謂未序を頒第を先生

[illegible]

文化甲子秋[illegible]

[illegible]一句井

枇杷園句集巻之一

春

年内立春

[illegible]年内立春八重[illegible]

歳旦

何度もおくて春迎[illegible]

元日[illegible]

松[illegible]

住吉しくさうそうの千年の

賀

小しはむや二年くる年の春しき

若葉

老ゝはむ人の葉をひとのゝらひる

古のひろひふる

ゆくすゑは人の葉のゝもとに栄ふ葉

萩

曉月宵孔雀ゝ杉村をいふ雲を

ゆくに杉のを垣引ゝ高ゝ雲に

この手き菴あ月の西ゝと

ゝへるゝきしるゝやゝ萩を

赤ゝ

世ゝすゝに萩ゝらん月と梅

梅

天山ゝ月日ゝ来ゝるゝめの花

花さかりの梅を見るとて
江の上や二人してをる梅の花
白梅の大きなる花中ゝ
筑州山庵のさかし秋枝氏
求よ立てるを見すて
ゆふ夏を
弱のいとしも香よ白ひらを梅の花
きさをきさ人のまゝろうめを食

九岳亭
うめうゝや藪の中まで掃ちきる
神東ようう
貫之のうゝのまくらそうめの花
梅うゝやうゝけあゝ香月花
芭蕉翁肖像開眼
眼も鼻も　うゝ免のまゝ
ひゝうゝ

月前

かゝひ半ばの影や嶽木のうめの花

暮雨菴法會

なゝめハうれ墓傍の白ひう郎

五十八山の巖六十八山の半腹もの

山路大仮ハあれ行そろ〳〵

まゐる行ゝ素さもるも

山ゐ山るき寺あるも梅の下結ひ

蛙

ほゝ〳〵し帰蛙蛙書し峠の松

蛙に書のくるゆゆ屋ゐ

ゆゆしきそ只蛙のさゝ石ゆ

小の小庭に蛙の来り

来りて庭掃のもゝ

告ゝられも

蛙もしもしゐ梅ゐ塩〳〵

鶯の声 書院の水さつかれて
とこてやら鶯なきぬる夏の月

柳

青柳にうき世の垢ハあらいけり
伊勢より

青柳のあめや小あゆのひとつ口
青柳や暮て帰る淀の犬
矢翁より

青柳の糸ハ百里この那
多草

わしの句ハ
霞

小ぶねのほくほくゆくうしろ
古寺のさくらハ朝うしろ
初瀬

胡螺貝の初鰹よとする高うな

春雪

たるの雪ゆるのさはらぬ枝もなし

旅人よ雪ハふまじともまちの宿

出山して

消のこる雪もあるかる借り

春雨

大佛のあめを見ゆくくたる急ぎ

春風

明日もあんあるも世をあんまの風

たゝ風やむもあるあてる擔うさ

仰ぎて

仰ぎしを世しさまとしらさり

うけるやたりとあしうたり

春月

春の月雉の声をる所仰きぬ

春の月松よこの世無たおろくす

湖月すみをるうちく也ものの月

花

しくやなるやとの影一枝

起くるを花見るやとの栄けり

笈乗るを花と見てこそ目さむれ

所といのはるて

ものもしを庵やさくるさひうへ

虎見菴

ひくくを見てあれを笈る梅ぶ

芭蕉堂新成会

肖像安置しまりて

賛るもうれやまけもり笈のみ

贈呉井

よきおぶハいひくきものを笈のみ

宇津の山ふるる

よきほとた花のうけある山路ぶ

四月ときの芭蕉人のおくろかな

芳野行

甲子吟行に曰ひとりよりみたかう
たとりるにおこたる山深く白雲
峰にこもり烟谷を埋んでは出
る岩もる其雨ふも降出おほつう
なきを分入るとくくれ
はるのとくくを笑ゆるをちこちの

山をくるるはくくに此雨り蕭のさ谷
はる水のやうを見るるとくくのる
ふるひるを蕭る花神は清し
芭蕉谷のおろこ庵世をうをや
とのる雨ひるを思ひ出るの仏を
さくろふこけ立ひされを見ひ仏ら
方に来るも清水をけ谷へ分と
花をまとに常住の月清るる谷

ハしとさみはらぬ屋しし

世を捨てあるとく　山頭火

さらの

嵐山

松さくら一木置ちりあるし山

花ちるまもしくさぬ嵯峨の宿

嵯峨の宿きて

ゆ〜うれかしてうつくしおもひ

水母寺

花は鉢いっぱいの罪ほろぼらん

年〜に苔の見やうのかはりうり

眉山の苔見むかし豊宮崎の文庫

をるとこの小に伝ふる山村の宝

の宝神ふる入る山のやとをぬる

とさへおもふ花ぬ

苔の木にむすれうみ寄る菴も

帰路

[illegible]

さくらの花ハ踏峰の花ちやる
踏やらちやをてきしらひゆく
[illegible]

神宮寺詣つ

焼塩の寺跡のさくら

[illegible]

玉置行

玉置のやうをみるにたつる風をなを
しらる林しをを用ふる多農
松ハ常ハ山居にむせふるいつれる
林しうさんさしを鉢ハ一ヨリて
用ハ百千にわらる百千にあるふ人形
多のしをを況や一ヨあるふ人をや
世のうきをるを住るを住る人

すやあんちいさき松の菴ホ文机の外
見るものなくかさ〻に同じさまし
坐る僧のあり〻るを茶を奉るいる
ある人なて宿らせるようと同へとも
見坐るのことなるものもいてすら
やはりしるを標をそこの戸を開けて
花のもしおもてもも宋ちるさるや
似てはおもふんるとかくゆおはりぬ

以へハ宿かりしゆすとそこるほうに
有る僧の戸をさしこめさるあそ
はるまくるあそ床しそれ日を要を
かそれこる見るものを紙くしく
小倉の山みをそうき木の宮
ゆそちり居る
紙夜やおほつかなくおもしもた
と口ささみ〻れハこの僧のおもりこる

菜のよく老てこの侍るをもはして
おくられぬるいとうれしくこの毎
ひとぬ

涅槃會

おれわとた見てるふるひ佛弘
道人のあてして申さぬ涅槃像
新買に申くひとをへも祝さん載

紫苑

紫のなる大名くるる林廊の事

桂五亭

紫のなにてあるよすあの柿云
かくれひられとも頼すあそ
させるそーきも見てすそ雀ハ
えたんねるそ

紫のなにロたてしてあこの常雀
梅ま肥こそ紫のなゆあるもなー

籔入

籔入や小さき笠をうちぬぎて

帰鳳

三井二夜あそぶ絶えるもたのしく

西湖

いま一度雪国よ籔よの屋敷

然谷よて

ゑるとしよ入る然谷先 唐このも

蝶

花まうとすれば蝶沖さ蝶と思ふ

堂

をみをこゝろみけし人形をこほろ

几巾

風巾ゆゑるさみ一きの花の桂

桂

ほゝ花せ花のゆゑきを帰桂

人もふえのはつもふしうの山ゑ弘

燕

乙ゑ農係よ毛ゑらぬ小白ゐ為
空木ゆむ中を燕の往来弘

雉

かへ可を来ゑる帰ゐ燒て雉の雄
ほろゝとハ苔よ雉ゑく柏ゑ載
ゑ可つを〜てハみゑくきゆ載

幻住菴ゑて

松ゆゑの雉ゆへゑを菴のあを

雛

ひなのゑる苔のゑけゑをこしてあぬ
すめゑも来るや雛の膳まゐり

桃

伏見ゑを日ゐれて来ゑるゆの巻

以下　久能山の歌よみ

いつ千世も毛ちとせのうゑゆくはるゝ

藤

藤のさかりおそくもりかとあやふし

実半日此宋をねもとハあるし半日の宋を矣ふされた宋ハねるさきのゝ小原の春よともなひるゆめの夢に

ゆしたりし後世菩提の侍り者宋をねるに昔をもとゝ小ハ宋引むす菴のうちに松の枝折ふるゝふ半日の楽ハ主人もゆるしゝ屋し遠

賀に琴を弾て月をのゝ友とすと

ふるのわらさゝろをへゝ

山藤の枯すしゝみし住居ゝ

題しらず

ぬるはりの小雪降る業みるうの屋
父母のあるじを外におくすめ
美しき砂に小松のみどりかな
月花を折るる見られた松の風
花とりやさらでも竹をみるうえ

善光寺に西行こもりたる人の

念仏の奇ハ月風月多くひろのおひ
半てしし五明月中に見れハ老さる
ひと半にるるまとに仏の手をとらせ
まゝ西さてそと見伸抜ちれまる
衣の袖うちさらふ寺しきもおくよろ
かひおるる拝集しるるそかゝけ
なき

朝れく風掃おを庭堂うな

暮春

あさくハこそし玉ゆく蔦の門
ゆく末をあされむ竹の日影

椿堂輯

枇杷園句集巻之三

夏

更衣

ふるさとハ父のまの箱入更衣

老懶

文衣人のきしきにおとろかぬ

和のたれ

和のたれもしらぬ垣ゆふ男うな

時雨

義しきやこるるの雨とおぼ
ゆるまで思ひ捨てても月花の面
むかふ面むかふ降もする時雨
住うしの橋うるるるるるるるる
ゆたやまの砂ハ三ツもあれ時雨

嵯峨提山宣堂ようす

公佛を米かむやうにほとゝぎす

なるゝ雨ようにいとゝの雨とおぼゆる
大ハ草はゝの風興面をこゝろひ出
月弱ゑのはみゝほとゝぎすの
来屋さきしさりとて二三ゝハ
例の瓢携来て松下の陰に蟹の足
やうちちゝぬ

追ふハ誰をやらゝ捨ゆゝ

若葉

逢さりやいつまでこきらら若葉

松陰廟にて

松陰前をつくる榊のはの若葉哉

茂

うくしゝ藤の前にも茂り哉

清備

尾花の峰をゆきさるゝにや

かけはしに揺ゆくひとの独り跡

とてむしろの上にれ坐し

某堂をはきさまへり

是はそうの佛をし隣に念を

竹子　蝸牛

きりけのおや子供ありてこむ寺の門

晩ときた竹の子とりふまれき

伊勢の東へきのふ行さり　蝸牛

牡丹

ちりぬべき牡丹つりこむ堀の内

當茶

五六代當茶たくる山あらし

枝子

白きに窮屈らみきゝあらし

あらしこゝろの又咲あらしの色

苔花

苔生るや花咲ぬ蕗もちぬ

諫鼓鳥

宋玉のすゝ家ましてあれ花の丹

數帳

連日のあめ所

日出くるまゝの

庫をこしらの

俳諧ひろやすめのあるしく數屋のお

雲

雪の野や大井原をゆくみち

粽

此廠やまこのしなうのさし粽

うりきにいくらもみとくちまき哉

五月雨

五月雨のいせふ陸とあき久かな

萱津の里

さみだれやめて屋の塀る雨ぬ

栗手の虎

ひとうの多つ蹲るの白さとる月百

竹酔日

竹けば植る日もひとのまるる植ぬ

竹ゝ家ゝのまゝ植よりと苔のまれ

竹ちきと庭ちて人の住居もちゝ形ゝ俗

なりゆくふいに人のてのえを
さし笑て俄に小さ紀伊を抜られぬさま
におのりつる人とハなり半るにすゆ
半とけう忘に来さ良きる帰さ武
まさ屋
あ一ゑ屋ゑるさてハみゆくさ屋
まさ田
う忘て去る山田を扉の色うてる

いセ吉兵衛うの茶屋あるふ
田を抜ふひとりもうへ半ぬいさらハ
松さのふさる
雨さの垣屋ゆけハまさ田うな
小雀
さ田よへハこれ帰れるハつるの門
古井のさと雨と風と亭まて
ふくゆうせし小雀の小田半ゆふ

紫陽花

紫陽花やうつしもとをる日の小雨

久方

久方やゆうもとけぬる老の杖

鶴川

待ひさしくうつるゆく鶴舟

金剛山の花ふとうつる

静の御堂清うつる長谷寺灯の百

經夜

みしらぬやゆ宿屋に泊る笠の露

夏月

太秦やそ休たうなり夏の月

夏の月ぬるくしくもゆる弓

国扇

光琳ろ ちらら時雨 古国扇

清水

蟬

蟬の口撥さし蟬なく木うつゝ

蓮

蓮咲ふる沙のいろさよ蓮の花

暑

あつき日や小庭の月ふ迄うつ

大蟻のたゝをあつまりあつまる

蜂

乃ちゝ母撥ふさきぬもの蜂

クヽさち

クヽさちや孔雀ふ火を蜂の霧の中

納涼

あつ日一ぬきみうつ日と栗と蜂

あこ石ふるすゝき月の出一泉

檀溪

すゝきに人の来ぬる草庵うち

丙午九月六日六月にゆきぬ谷の
ひまく雪をたゝき桜原のおく花を
探しるる四時のけしきひとりして
のこるものれし何を別に仙境を
尋ねむ

ゆゝしきの多さよ木曽の冬ごもり

れ板

雨猿しるるきや苔いろ花袋

宇洋輯

藤園堂
450

愛知県
1103269291